「戦時下における児童文化」について（その二）

――「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開（二）――

熊木　哲

「戦時下における児童文化」について、前稿（「大妻女子大学紀要―文系―」第二八号、一九九六・三）に引続いて検討する。検討に際しての枠組み等は前稿を踏襲する。なお、「書方」作品の検討に際しては、作品に沿い、旧字体を使うこととする。

一　「作品紙上展覧会」の展開についての補足

前稿において、昭和十二年から十五年までの「作品紙上展覧会」の展開を検討した中で、「欄」の設定が次第に少なくなっていくことの理由を推測して、次のように述べておいた。

その一は、読書の投稿作品の掲載が「作品紙上展覧会」欄のみでなくなったこと。例えば、十二年五月には、「カタカナニュース」の掲載されている紙面にも火曜から日曜にかけて、つまりは毎日ということになるのであるが、「自由詩」「習字」「図画」「俳句」などが掲載されており、同様に、毎日掲載されている「勉強室」の紙面にも、「綴方」「俳句」「短歌」などが掲載されている。

「東日小学生新聞」となってから初めて「作品紙上展覧会」欄が掲載された九九号には応募の規定である「紙上展覧会のきまり」が掲げられ、そこには、確かに、「日曜日の紙上作品展覧会に、皆さんの作品を募集します」とある。当初は、「日曜日の紙上作品展覧会に」ということであったことが推測できるところであるが、次第に投稿作品もふえ、「日曜日の紙上作品展」のみでは、掲載できなくなったことから、作品を「欄」に限らず掲載するようになったといえようか。逆にいえば、火曜日から日曜日まで、多くの作品を紹介するようになったことから、日曜日に単独枠を設定する必要がなくなったとも推測しうるところである。

その後の紙面調査によって、この〈推測〉に補足を加えておきたい。

「紙上展覧会のきまり」は、九九号つまり昭和十二年一月十七日では、「日曜日の紙上作品展覧会に、皆さんの作品を募集します」とあり、このことは、前日の十六日の九八号でも同様の内容であった。

ところで、一月三十一日（一一一号）には「投書のきまり」が掲載されており、そこには「日曜日の紙上展覧会に、又毎日の俳句、短歌欄にみなさんの作品を募集します」とある。つまり、読書の作品投稿は、「日曜日の紙上展覧会に、又毎日の俳句、短歌欄」にと募集されていたのである。このことは、実際の掲載によっても確認された。例えば、同年一月八日(金)の第四面には、「綴方」の見出しのもとに、「私の目」と題した作文が掲載され、それ以後も、十二日(火)、十五日(金)にも「綴方」があり、十三日(水)、十六日(土)には「綴方」の

ほかに「書方」の作品も掲載され、「俳句や短歌」も「綴方」と同日に掲載されている日もあり、ほぼ毎日、投稿作品が見られるのである。

従って、前稿での〈次第に投稿作品もふえ、「日曜日の紙上作品展」のみでは、掲載できなくなったことから、作品を「欄」に限らず掲載するようになったといえようか。逆にいえば、火曜日から日曜日まで、多くの作品を紹介するようになったことから、日曜日に単独枠を設定する必要がなくなったとも推測しうるところである〉との「推測」は、若干の訂正が必要であろう。なぜ、「日曜日の紙上作品展」が少なくなっていったのかについては、「紙上作品展」と同一紙面に連載読み物が組込まれていったり、「紙上作品展」そのものの紙面が無くなっていることからは、投稿作品の掲載に紙面を割くのではなく、記事で埋めるようになったためとも考えられようが、その理由は詳らかではない。今後の検討を待ちたい。

二　昭和十三年年頭における位相と展開

本稿では、昭和十三年の「作品紙上展覧会」における「児童文化」の位相と展開について、第一四半期（一月から三月）を検討する。この検討時期の区切りについては、この十三年という年が、四月一日に「国家総動員法」が公布されるに及んで、また新たな「戦時下」に置かれることになったとの認識からである。

昭和十三年（一九三八）の「作品紙上展覧会」は、一月九日付け第四〇四号から始まった(欄見出しは「紙上作品展」)。第八面の全面を使い、「綴方」一篇、「詩」二篇、「俳句」五句、「書方」（習字）六作品、「図画」七作品（欄見出しカットを含む）の投稿作品が掲載された。いわゆる正月気分の作品は見当たらない。掲載時期から考えて、暮れまでに投稿された作品を載せたということであろう。

「綴方」は宮城県の尋常小学校二年の「そりあそび」。友達との「そりあそび」の楽しさを素直に描き、表現も会話には方言を用いるなど、「二年生」にしては上出来の作品といえる。「図画」七点の内訳は、風景画二点、鉢物の花を描いたものが二点、向日葵が一点、土瓶と湯飲みを写生した静物画一点と校舎の写生一点。何れも季節感や時節柄を扱ったものではない。

しかし、「詩」二篇のうちの一つ、「千人力」は「戦時下」そのものである。

沼津市第四校六年　飯田富士男

熱ちやんがやつて来た。
手に千人力の布を持つてゐる。
見るとみんな力とかいてある。
力一ぱい書いたらしく字にその心が現れてゐる。
おれも筆をきつくにぎつた。
これが戦地にゐる兵隊さんを守るのだ。
一生けんめい書いたが布へにじんだ。
けれどもおれはいゝ兵隊さんを守るのだ。

「千人力」は、出征兵士の武運長久と無事を祈って、一枚の布に千人の男子が「力」の字を一字ずつ書いたもの。女性の手で行われる「千人針」に対応する。この「詩」からは、「戦地にゐる兵隊さん」は「熱ちやん」の周辺にいた者か、或はこの「千人力」が、「熱ちやん」が「慰問袋」に入れて戦地へ送るためのものであったかは定かではないが、「熱ちやん」にとって「戦地」は遠いものではなかろう。作品からは、作者の少年にとって身近な「兵隊さん」のための「千人力」とまでは読み取れないが、「千人力」の何たるやを理解して書いている少年像が描かれている。作者の少年にとっても「戦地」との回路は結ばれていたというべきであろう。日本軍が南京を占領したのは、前年十二月十三日のことであり、この作戦を含めて、中国大陸に駆り出された兵士の数は夥しいものであったという。少年の知り合い

が出征していたとしても不思議はないほど、「戦時下」の傘が広がっていたと考えさせる作品であろう。

「俳句」は、次の五句。

埼玉県河合校高一　細井　正
霜の朝焚き火に集ふ人の群

神奈川県明治校六年　植木　行雄
落葉して校舎淋しくなりにけり

北海道早来校五年　増坂　二夫
つはものゝこと思ひけり雑煮餅

山形県藤島村五年　阿部登美子
電線の片側白し吹雪かな

新潟県村上校高一　石田　捷一
汽車の窓打ち振る旗の白さかな

「霜の朝」「電線の」の句は、埼玉と山形の季節詠として、その気候の違いを髣髴とさせる。「つはもの」とは入営したか、出征した兵士であろうが、作者の身近な「つはもの」が正月に不在である様子を窺わせる。「汽車の窓」の句は、「汽車の窓」に映っている旗の白さを詠んだものであろうが、この旗が打ち振られている光景は出征兵士の見送りであろうか。「戦時下」の一齣を見る思いがする。

「書方」作品六点のなかの一つに、「天皇陛下萬歳」がある。四年生の作品であるが、学年からは立派な楷書作品だ。その書かれた字句も、巷間に流布しているものであったろうが、これまでの「紙上作品展覧会」には見られなかった。また、以後の「紙上作品展」では、第五一二号（五月十五日）に一作品が見られるほかは、ないようだ。少々、急いでの検索であったが、少なくとも、昭和十五年までの「東日小学生新聞」の「書方」作品としてはこの二作品以外は見当たらないようである。

このことをどのように理解すべきなのであろうか。戦場においては「天皇陛下万歳」と叫んで死んでいったといい（事実は別として）、事ある毎の行事には、必ずといっていいほど唱えられた字句であったであろうに。これを「書方」の字句とすることに憚るところがあったのであろうか。

翌週、一月十六日（第四一〇号、五面）の「作品紙上展覧会」（欄見出しも同じ）には、「綴方」二篇、「詩」三篇、「短歌」五首、「書方」十二作品、「図画」七作品が掲載された。

「綴方」の一つ「お隣のをぢさん」では、「お隣のをぢさんは、山田部隊の砲兵です。九月五日に出征されました」と書いている。「東京市六郷五学年」の女子の作品であるが、文字通り「お隣」まで出征兵士となって、戦場に行った。「をぢさんは今きつと戦地でお家のことを思つていらつしやる」から、お隣の子供たちを「おぢさんが帰るまでお慰めしなければなりません」と決心する、という作品。「お隣のをぢさん」は、幼子を残して「戦地」に送られていったのであろう。五年生の少女は、「お隣のをぢさん」からの手紙を父親から聞かされ、「お隣のをぢさん」は「さみしいことでせうね。でも日本の兵隊さんは強いから、きつと勇ましく働いてゐるのだと思ひます」とも書いた。しかし、「強い」日本の兵隊さんを誉めたたえる作品というよりは、幼子と別れて「戦場」にいる「をぢさん」の心境を思いやる作品といえよう。少女は、「学校に行く時、お隣の家の前にはいつも国旗がひらひらとかゞやいてゐる」のを見る。その度に、少女には、「戦場」にいる「をぢさん」の姿が映るのであろう。「東京」の少女と「戦場」とは無縁ではなかったと言うべきである。

ところで、この作品では、所属部隊が明記されている。この頃、新聞表記には、まだまだ規制は緩かったということであろうか。

「詩」三篇のうち、江森清「冬の夜」（埼玉県五年）は、次のような作品。

弟がいびをかいてねてゐる。
お母さんは電気の下で針仕事、僕はだまつて火鉢にあたつてゐる。
前の道を通る人の足が、寒そうにひゞく。
おぢいさんが「そろ〳〵ねようかな。」と言つた。

題の「冬の夜」が素直に表現された作品といえよう。「冬の夜」を聴覚的に捉らえた表現が、静かさや寒さを効果的に現している。だが、この場面には、父親の姿はない。父親は、近所まで出かけてまだ帰ってこないだけかもしれない。或は、病や事故で亡くなってしまっているのかもしれない。或は、軍隊にとられ、戦場に送られているのかもしれない。「だまつて火鉢にあたつてゐる」「僕」の心境はどのようなことであろうか。

この「僕」の姿に重なるのは、翌週の「紙上作品展」での一句、「母や子は父のがいせんいのるなり」(横須賀市汐入校四年、伊藤宏。第四一六号・一月二十三日)。「冬の夜」の父親のみえない家庭風景に「戦時下」を読み取るのは行きすぎであろうか。

「書方」作品は、正月の掲載ということを意図した応募であろうか、前年正月にも見えた「四方拝初日影」や「はつ空高し」「正月はつゆめ」「たこいか」などの字句が作品化されているが、「盡忠報國堅忍持久」(六年生の作品)の字句は、前年、昭和十二年九月十三日に発表された「国民精神総動員実施要綱」による総動員運動のスローガン「挙国一致　尽忠報国　堅忍持久」であった。しかし、この時局標語は、「書方」の字句としては、これまで「紙上作品展」の作品には見えていない。総動員運動の展開と浸透状況の一端を窺わせるところであろうか。

「報国」に被さる標語は、時勢の逼迫に従って氾濫することになるが、「紙上作品展」における「書方」作品の字句としては、前年の第二六一号(昭和十二年七月二十五日)の「興農報國」(高等科二年)の一作品がある。十三年度としては、第四六四号(三月二十日)に「盡忠報國挙國一致堅忍持久」(高等科一年)、十五年度に「健康報國」(五年生)が見られる程度である。講談社『昭和二万日の全記録』(第五巻、平成元・一一)によれば、昭和十三年には「貯蓄報国」、「科学報国」「清掃報国」などの標語もあったという。

「戦時下」をより直接的に現した「書方」作品は、「ナンキンカンラク」のカタカナ作品であろう。しっかりした筆跡からは「五歳」の作品とは考えられない出来栄えであるが、この字句の選択は「五歳」の判断であろうか。日本軍が南京を占領したのは、この作品が掲載される一月ほど前のことであり、「南京陥落」の報には日本中が沸き返り、昼は旗行列、夜は提灯行列というありさまであったというから、五歳児が「ナンキンカンラク」の字句を選んでも不思議はないといえばいえるであろうが、その選択に五歳児の自主性まで読み取ることは、無理があろう。

昭和十三年第三回は、「紙上作品展」(第四一六号・一月二十三日、八面)の見出し。「綴方」二篇、「詩」一篇、「短歌」七首、「俳句」五句、「書方」一二作品、「図画」四作品が掲載された。この第三回の特徴は、前の二回と比較すると、「戦時下」色が濃いということである。

「綴方」の「歓送」(山梨県宮谷校六年、長田寅夫)は、「隣の兄さん」の出征を見送る作品。

数日前からの召集で、村は非常なさわぎだ。僕の隣の兄さんも出征される事になつた。六日の朝、父が「お前達も兵隊を送るだらう。」と言つた。お宮の庭に神前奉告祭が行はれ、僕等小学生一同整列した。先づ神主の祝詞、それから出征兵の挨拶、やがて大人は大御酒(ママ)をかわし、村長さんの音頭で、万歳の声、静かな森に、こだまして、山野をゆるがすばかりに轟き渡つた。

やがて進軍ラッパも勇ましく、停車場に見送の行列は続いた。行く〳〵戦争の話をしてゐる中に、いつか鳥沢駅に着いた。今日村からの出征が十四人、広い駅前も人にうづまるさわぎ。僕等はいつもの所に整列、「勝つて来るぞと勇ましく誓つて国をでたからは」と一斉に歌つてゐる中、ゴーッと電車はホームに勢よく入つて来た。万歳は叫ばれる、日の丸の旗は翻へる。電車は僕等の前に来た。旗の波、万歳の声、兵隊さんも、はち切れる元気さで、万歳と云つてゐる。しばらくの間、ただ万歳々々、あだかも山を越え海を渡つて、敵地まで聞こえるかのやうに。電車は行つてしまつた。後は水をうつたやうな静けさ。僕は張りきつた兵隊さんのお顔が、まぶたに浮ぶ。

「数日前からの召集で、村は非常なさわぎだ。僕の隣の兄さんも出征される事になつた。」の書き出しは、効果的だ。「出征」さわぎが、「隣」までやってきた。お祭りのような高揚感だ。駅についてみると、「今日村からの出征が十四人」もいた。「六日」がいつの「六日」であるのか、判然としないが、「十四人」もの召集出征となれば、「村は非常なさわぎ」に陥るであろうことは、想像に難くない。その上、「村」からの「出征」は、これが初めてではなさそうだ。駅での見送りに、「僕等はいつもの所に整列」するのであり、出征兵士の駅頭での見送りが経験化されていることを窺わせる。「戦時下」の日常化ともいえよう。

「歓送」では「隣の兄さん」が出征したが、「伯父ちやんが出征」したのは、「詩」の「鉢運び」(沼津市六年男子)。「伯父ちやんが出征をしてから、物置は仕入をしていないので空つぽ」。「僕」が父親と仕入れてきた「鉢」を物置に入れるという作品で、一見、家業の手伝い風景であるが、その底には家業にも影響を与えざるを得ない「出征」があるのである。

第三回の特徴は、前の二回に比べて、「戦時下」色が濃いといえるが、直接的には、次の「短歌」により顕著といえる。

王子区第二校六年　高橋　泰禧
抱きたる子にも小旗をふらせつゝあしたいで立つ兵を見送る

静岡県土方校四年　三輪　幸雄
昨日も今日もお宮へ行つて兵士らの武運長久祈る僕たち

静岡県土方校四年　河内　栄一
ぐわうつと汽車は進み来たくわんこの声で兵士見送る

静岡県土方校五年　松永　庄五郎
僕たちも早く大きくなりたいな心の中は出征兵士

牛込区牛込高校一年　田中　勲
みあかしのゆらぐにさへも心して戦の兄を祈る母上

「俳句」にも、「母や子は父のがいせんいのるなり」(前出)があった。「短歌」は、七首のうちの五首が「出征兵士」のからみであり、うち、三首が「静岡県土方校」の在校生による作品であった。学校を挙げての取り組みでもあったのであろうか。教育現場における「戦時下」の一端を垣間見せられるようである。

一月の第四回「作品紙上展覧会」は、これまでの経過からすれば、第四二二号・一月三十日となるが、この日曜日は、企画展「懸賞募集〝飛行機の自由画〟当選発表」。「綴方」はじめ、その他の作品の掲載はない。

この企画は、「私たちの東日小学生新聞では、発刊一周年を記念して空へ伸びようとする皆さんへの励ましのために、全国の皆さんから飛行機の自由画を懸賞募集」したもの。「毎日々々航空報国の真心を表して愛国切手をはつた、思ひ思ひの力作が山ほど」集まったものの結果報告。「愛国切手」は、昭和十二年六月一日、逓信省が発行した初の募金付き切手。飛行機の図柄で、二銭が寄付として民間飛行場の

建設資金に充てられるため、売価は四銭となった。同時に、切手二種とはがきが発売された。

「空へ伸びようとする皆さんへの励ましのために」とする意図は、必ずしも明確ではない。「小学生」に「航空報国の真心を表」わすことを要請する企画ででもあろうが、「航空報国の真心」の意味するところは、どのようなことであろうか。字義からは、「航空」で「国」に「報」いるということであろうが、「航空」で報いるとは、航空兵になれということではあるまい。

いずれにせよ、「逓信大臣賞」「帝国飛行協会賞」「東日賞」の「優等」三名のほか、「佳作入選作品」二十名の、計二十三作品が掲載されたが、図柄は、時局を反映した企画故に、戦闘機が多く描かれた。

「航空報国の真心こめ　画面に躍る意気　見事な出来ばえの作品」の第一席、「逓信大臣賞」は、浅草の小学校二年の女子であった。この受賞者は、「先だってもよその展覧会に皇軍慰問の図画を三枚出して、全部入賞」したという。「航空報国の真心」とは、飛行機を描くコンテストといったところか。これも、時勢標語の氾濫現象の一端といえようか。

三　昭和十三年二月の「作品紙上展覧会」

二月の「作品紙上展覧会」は、すべての日曜日に掲載され、この月は四回。

第四二八号（二月六日、欄見出し「作品紙上展覧会」）には、「綴方」二篇、「詩」一篇、「短歌」三首、「俳句」二句、「書方」一四作品、「図画」一一作品が掲載された。

「綴方」の「爪きり」（福島県五年女子）は、姉妹がお互いの「爪きり」をするというもの。姉の番になり、妹に爪を切られている姉は、「妹の小さな手が動くたびに、なんだか、くすぐったい気がしてならない。炬燵の上に手をのせて、無心に動く妹の顔をじっとみつめてゐると、かはいさがこみあげてくる」と結ぶ。姉が妹をかわいいとしたり、幼児や年少者など愛おしく思うといった内容の「綴方」が、前年に多く見られることは、前稿において、確認したところである。その意味では、こういった内容の作品が、いわばオーソドックスであったといえよう。

もう一つの「綴方」作品は、「寒稽古」。題名どおり、高等科一年の男子が、剣道の「寒稽古」をしたときの感想。二つの作品に「戦時下」の影は全くない。

「詩」の「ねずみのミシン」は、ユーモアに溢れた、楽しい作品だ。

静岡師範附属校五年　鈴木　秀子

ねずみのミシン、がたがた〳〵、
天上うらで子ねずみが、
一生けんめいやつてます。
暗いせまい天上うら、こどもの使ふみしんです。
ねずみのミシン、かはいゝね。
ねずみのおうちの子供部屋、
長いしつぽをちよつとまげて、だれのおべゝをつくつてる。
ぽつちより電気もほしからう、
長いおひげがじやまになる。
ねずみのミシン、おもしろい。ねずみの町にも暮が来た、
せはしい〳〵暮れが来た、
それお正月だ、赤いべゝ、
はごいたついてはねついて、
ちよろりおそなへとつてくか、
急げや〳〵がた〳〵がた、
ねずみのミシンいそがしい。

「ちよろりおそなへとつてくか」の一節などは、巧み。天上裏で駆け回るねずみは、大抵の家にいたものだ。それを「ねずみの運動会」などといったものだが、季節からすれば、ねずみの暮れと正月を使ったところに成功があるといえよう。勿論、この作品に「戦時下」を読み取ることは出来ない。平和な生活詩とでもいえよう。

「書方」作品にも、その字句に「戦時下」を思わせるものは少ない。一四作品中、「コウグン」（千葉県三年男子）のほか、「バンザイ」（山梨県一年男子）があるだけである。この他、「大内山松の緑」の字句を書いた作品が三つ。東京世田谷、茨城県、横浜市の、いずれも五年生の作品である。未調査であるが、教材からの字句であったのであろうか。

「図画」の一一作品は、「作品紙上展覧会」の欄見出しに使われている海岸の風景画をはじめ、八作品が風景画、読みかけの本を描いたものが一作品、海戦中の戦艦の図柄と飛行機が編隊で飛んでいる図柄の作品がそれぞれ一点ずつの二点。八点の風景画のうち、日の丸を掲げた家の上空に飛行機が描かれた作品が一点。「図画」においては、「戦時下」を反映した作品が多少、目につくといったところである。

「戦時下」ゆえの作品としては、次の「短歌」と「俳句」がある。

秋田県千屋校高一　戸澤　武雄

戦線に出てゐる兵士の母親は寒さをしのびシャツあんでゐる

牛込高校一年　田中　勲

出征の兄に書初送りけり

「シャツ」は、セーターのことであろうか。編んでいるのは、作者の母であるかどうか、はっきりとしないが、よその出征「兵士の母親」を詠んだとも考えにくいところがある。ただ「出征兵士」を持った「母親」が「寒さをしのびシャツあんでゐる」様子を目にしたことからの作品であろうとの推測は可能ではなかろうか。いずれにせよ、この作者の身内か周辺に、「出征兵士」がおり、「出征兵士の母親」がいることからの作品であろう。

「俳句」の「出征の兄」は、正しく、身内の「出征兵士」である。

ところで、前述した第四一六号（一月二十三日）掲載の短歌「みあかしのゆらぐにさへも心して戦の兄を祈る母上」の作者も、「牛込区牛込高校一年田中勲」であった。在校名と作者名から、加えて、作品内容から考えてみると、この俳句の作者「牛込高校一年田中勲」と「みあかし」の作者とは同一人物と推測できよう。「短歌」では、戦場にいる兄を気づかう母の内面を詠い、この「俳句」では、自分と兄との関係を詠んでみせたということであり、戦場と弟とが「書初」によって結ばれている。「戦時下」ならではの「俳句」作品といえよう。

以上、第四二八号（昭和十三年二月六日）には、「戦時下」を感じさせない作品が多く、その意味では、「小学生」と戦場の距離は離れているようにも見えるが、「図画」や「短歌」「俳句」作品からは、もはや「戦時下」から無縁などということはありえない状況をみせているといえよう。

第四三四号（二月十三日）、四四〇号（二月二十日）、四一六号（二月二十七日）をまとめて検討してみたい。

三回とも、欄の見出しは「紙上作品展」。「綴方」は、第四三四号が二篇、四四〇号が二篇、四一六号が二篇で、合計六篇。「詩」は、それぞれ、三篇、二篇、二篇の、合計七篇。「短歌」は、それぞれ、四首、四首、八首の合計で一六首。「俳句」は、それぞれ、三句、三句、六句で、合計一二句。「書方」は、それぞれ、一四作品、一六作品、一六作品の、合計で四六作品。「図画」は、いずれも欄見出しカットを含めて、それぞれ、九作品、六作品、九作品で、合計二四作品となっている。

「綴方」六篇の内訳は、「新校舎に移って」（福島県五年男子）、「オトウト」（群馬県一年女子）、「資源愛護」（新潟県六年女子）、「オテガ

ミ」（東葛飾一年男子）、「お使」（横浜市四年男子）、「今朝」（麴町区三年男子）。「オトウト」「オテガミ」は、カタカナ文。これらの題名から見る限り、一見して「戦時下」を思わせるものはない。

「新校舎に移つて」「お使」は、文字通りの内容で、前者は、新しい校舎に移った事、後者は、お使いに行っての微笑ましい失敗談。「今朝」は、寒い朝の通学風景。これらは、いずれも、小学生の生活風景の一齣であるが、小学生の生活に大きな部分を占める学校生活では、微笑ましいとばかりとは言えない状況が生徒の現実であった。

以下は、「資源愛護」（新潟県見附校六年、井口とみ子。第四四〇号）の前半。

支那事変が起きて未だに戦はやみません。やむどころかいよ〳〵大きくなつて行くやうです。その間には日本の武器類やその武器類よりも大切な兵隊さんたちが失われて行きます。そして日本がだんだん弱つていくうちには、あの恐しいロシヤが赤い魔手を日本へのばしてきます。イギリスがねらつてゐます。そこで銃後の私達は、生物や草木を愛し、又は捨てるやうな物を利用して、少しでも外国からの輸入を防がうと思ひます。学校でも先生が資源愛護廃物利用等についてくはしくお話をして下さいます。

「先生」の話は、うさぎは「不要な草」で育てられ、大きくなれば生んだ子が売れ、毛皮は戦地に送られて兵隊さんの防寒服になり、肉は食物になるから、うさぎを飼うことも「資源愛護」になるというものであった。「私」は、家で飼っているうさぎを見て思った。

私は此のかはいい小動物の毛は戦地の兵隊さん達の防寒服となり、肉は立派な食糧となつて、御国の為になるのかと思ふと、この非常時日本の国につかはされた天使の如く、急に尊いものにおもはれました。

「非常時日本」における小学校高学年に対する「愛護」教育の一端を窺わせるものであるが、「あの恐しいロシヤが赤い魔手を日本へのばしてきます。イギリスがねらつてゐます」との認識も「愛護」教育の成果であろうか。「ロシヤが赤い魔手」は分かるとしても、「イギリスがねらつてゐます」とはどういったことであろうか。「鬼畜米英」の標語があることからは、「英」も当然、その対象であろうが、「イギリスがねらつてゐます」ということは、「先生」の「お話」の文脈に「阿片戦争」でもあったのであろうか。

カタカナ文の「オトウト」「オテガミ」はともに、一年生の作品。「オトウト」（群馬県女子、第四三四号）は、言葉もよくわからない二歳の弟に、「私がシュッセイヘイシトイフト、スグリヤウ手ヲアゲテ、バンザイヲシマス。シツケイヲシテゴラントイフト、オモシロイ手ツキデ、ミミノ下ヲカキマス」というもの。かわいい仕草とばかりにはいかないところであろうか。子供は、否応なく、時代の、時勢の下にさらされている。二歳児に、「出征兵士」の意味が分かるとは思えないが、二歳児はこの仕草をどのように刷り込まれたのであろうか。家庭の中か、或は抱かれて「出征兵士」を見送る場面でか。どちらにせよ、二歳児にさえ、「戦時下」が日常的になっていたということであろう。

「オトウト」の結末は、この二歳のやんちゃな弟がすることを「一人ノヲトコノ子デスカラ、オトウサンモオカアサンモ、シカタガナイトイフダケデ、スコシモシカリマセン」というもの。一年生のお姉ちゃんは、シカラレタ記憶がしっかり残ってでもいるようだ。「オトコノ子」だからと何事も許されてしまうことに、抗議する気持ちが滲んでいるようでもある。

「オテガミ」（東葛飾男子、第四四〇号）は、戦地におくった慰問袋の返礼に対する「テガミ」。「ヘイタイサン、カゼヲヒカナイデ下サ

イ。シナダツテ、トテモツヨイデセウ。デモ日本ノ方ガツヨイネ、セカイ一ダネ」とするもので、特定の兵士に宛てたものではないが、慰問袋を戦地に送ることも小学生の「戦時下」であったといえようか。

七篇の「詩」の内、「戦時下」に関するものは「夜」（荏原区中延校五年、石川一英。第四四六号）。

弟の寝息がかすかに聞こえる。
妹のはぐう〳〵とものすごい、
柱時計がぼん〳〵と九時を打つた。
歌が外から聞こえる、材木屋の小父さんがお湯へ入つてゐるのだ。
遠くそば屋のキャルメラの音、
今夜もいゝ月夜だ。
お父さんはあの月の下で、
勇ましく働いてゐるだらう。
戦地の父へ上げるこの手紙
鉛筆はすら〳〵と紙の上をすべる。

弟の寝息が「かすか」であるのに、妹の方が「ものすごい」などとは、たくまぬユーモアがある。「材木屋の小父さん」は、いつも湯に入って歌っているのだろう。遠くでチャルメラが聞こえる。手紙を書きながら耳に届くものは、のどかでさえある。静かで、平穏な月夜だ。しかし、こうした静かで、平穏な月夜も「戦地の父」へつながっている。自分が見ている月を父も戦場で見ている。一つの月の下、父は戦場、子はその父に便りする。絵にかいたような「戦時下」であろう。

「短歌」は、一六首。

葛飾区新宿校高一　伊藤誠四郎

日曜日雨の降るのは兄さんは傘もさゝずに出征したり
同　大出　雅男

弾雨下で慰問袋のひもといて故郷をしのぶつはものの群
北海道江別校高一　島崎　巌

支那海の怒涛にもまれ沿岸の封鎖にあたる我が軍艦
（以上、第四三四号）

岩手県福岡校五年　高尾美知子

山にねて鉄道警備に夜もなしと父の手紙を母とよむ午後
栃木県真岡校高一　小塙　セン

我が友の父は戦に傷ついて支那地の野戦病院にあり
山梨県塩崎校五年　田中　友子

負傷をば早くなほして戦線にも一度兄は行きたしといふ
葛飾区新宿校高一　網代　豊彦

南京の陥落少しもわからずに子ら旗持ちてかけずりまはる
沼津第四校五年　杉山幽美子

照り映ゆるみ空の月を兵隊さんどこの陣地で眺めをるらん
（以上、第四四六号）

このように、一六首中、八首に、「戦時下」が詠み込まれている。父や兄の出征は、もはや日常化した風景ともいえるが、身内の兄や「友の父」の負傷が詠まれた作品が「作品紙上展覧会」に掲載されたのは、この第四四六号（二月二十七日）からである。「東日小学生新聞」に「作品紙上展覧会」が設定されてからでも、盧溝橋事件（昭和十二年七月七日）以来の日本軍と中国軍の戦闘は間断なく行われていたのであるから、当然、負傷したり死亡したりしたはずである。海軍の病院船「朝日丸」が帰港したのは、一月十二日であり、一月三十日には、三八四人が病院船「瑞穂丸」で帰還した（『昭和二万日の全記録』前出）。傷ついた兵士を詠んだ作品の掲載という事態にまで至ったということであろう。

確かに、「短歌」一六首中八首に、「戦時下」が詠み込まれてはいるが、あとの八首は、直接「戦時下」とは関わりのない作品であった。「いたむ歯を氷でひやしおさへつゝなほもたべたき好物のお菓子」(中野市六年女子)、「火の用心幾つならすかカチ〳〵と寝床の中で寒さを思ふ」(栃木県六年男子)といった作品がある。歯が痛くっても「好物のお菓子」は気になってならないものである。子供らしい素直な心情だ。「寝床の中」にいるだけに、夜回りの寒さが一層思いやられるとの作品には、他者の苦労を思いやる健気さがある。時代を、時勢をこえての作品といえよう。

「俳句」は、一二句。

「山の上スキージャンプのあざやかさ」(宮城県三年男子)などの、季節柄か、冬や雪を詠んだ句が多いが、やはり、「戦時下」からは、逃れることはできない。「入営ののぼり三本なびてる」(仙台市三年女子)、「空爆の勇士の心たゞ皇国」(城東区高二男子)のほか、出征風景と思われる「神主の声高らかに祈願祭」(静岡県六年男子)がある。「短歌」の五割までではないにしても、「俳句」にあっても掲載作品の四割が「戦時下」ということになる。

「書方」は、四六作品。直接的に「戦時下」を扱った字句は見えない。なぜなのであろうか。驚きでさえある。時局順応といった編集には、未だ時間的余裕があったということであろうか。

「図画」は、合計二四作品。このうち、明らかに「戦時下」を思わせる作品は、戦闘中の戦車の作品と航海中の戦艦を描いた作品の二点のみ。その他は、風景画が七作品。静物画が五作品など。また、同じ少女人形を描いたと推測される作品が二作品。いずれも、福島県梁川校六年女子の作品。「ご時勢」のなかで、「梁川校」での、或は担当者のあり方を思わせられるところである。

四　昭和十三年三月の「作品紙上展覧会」

三月の四回分、第四五二号(三月六日)、四五八号(三月十三日)、四六四号(三月二十日)、四七〇号(三月二十七日)をまとめて検討する。

欄の見出しは、第四五二号が「作品展覧会」、四五八、四六四号が「紙上作品展」、四七〇号は単に「作品展」とある。欄見出しも一様でなかったということである。

「綴方」は、四五二号が二篇、四五八号が二篇、四六四が三篇、四七〇号が三篇、合計一〇篇。「詩」は、それぞれ、二篇、二篇、二篇、二篇の、合計八篇。「短歌」は、四五二号に三首と四七〇号に一首あるのみで、合計四首。「俳句」は、それぞれ、一〇句、五句、四句で、四七〇号には掲載が無く、合計一九句。「書方」は、それぞれ、一六作品、一六作品、一二作品、一四作品で、合計で五八作品。「図画」は、いずれも欄見出しカットを含めて、それぞれ、八作品、五作品、四作品、一一作品で、合計二八作品となっている。

「綴方」一〇篇の内訳は、「東日小学生新聞」(北海道五年女子)、「吾妻山に遊んで」(桐生市高二男子)、「こまをまはす子」(長野県六年女子)、「飛行機」(埼玉県三年男子)、「我等のバリカン」(静岡県高一男子)、「さむい夜」(小樽市四年女子)、「ウチノトシヲ」(群馬県一年女子)、「電話」(茨城県高二女子)、「猫の思出」(本郷区二年男子)、「謄写版」(横浜市四年男子)。

この内、「戦時下」が現れているものは、「飛行機」と「ウチノトシヲ」の二篇であるが、その現われ方もいわば控え目なものであった。「飛行機」では空を行く三機編隊の戦闘機を見上げて、「世界一強いわれらの空軍、此の空軍が守つて居てくれれば、日本は天地の続くかぎり、いつまでも続くぞ」と思い、「けれども強いからといつて、ゆだんは出来ない」とも思ったという作品。「ウチノトシヲ」は、カタカナ文の作品で、父親が帰ってきて、レコードの「カツテクルゾト」をかけると、乳飲み子の「トシヲ」が手をたたいて喜び、「ソシテワタシモレコードトイツシヨニウタヒマシタ」というもの。「カツテク

ルゾト」のレコードは、言うまでもなく「露営の歌」。昭和十二年九月二十日、日本コロンビアからレコードが発売された。大阪毎日・東京日日新聞社が歌詞を懸賞募集した「進軍の歌」の佳作作品であり、「進軍の歌」のB面に吹き込まれたが、発売六ヶ月で、なんと六〇万枚を超える大ヒットとなった（『昭和二万日の全記録』前出）。「ウチノトシヲ」の作者は、「群馬県采女校」の一年生。第四一六号（一月二十三日）掲載の「綴方」作品「歓送」と併せて、「露営の歌」の流行ぶりをおもわせられるところだ。

「詩」は、「石段」（栃木県五年男子）、「風呂に入る時」（千葉県高一女子）、「写生」（沼津市六年男子）、「火事」（茨城県高一女子）、「さゝぎ」（沼津市六年男子）、「縁の下」（同男子）、「早春」（京橋区五年男子）、「煙」（山梨県三年女子）の八篇であるが、題名からも推測できるように、「戦時下」は一節、一語もない。

早　春　　京橋区京橋校尋五　鈴木　昇

勉強をへてふと聞けば、
そよ〳〵風の吹く中に、
子供のうたふ春の歌
庭は緑のさゞ波か。
目をばうつせば八重桜、
かわいゝ芽をばえにつけて、
ひばりの声を葉の中に、
春を喜びむかえてる
静かにゆれる水面にぽつつりおちる葉のしづく。
やがてはうづの輪をかいて、遠くひろがりきえて行く。

第四七〇号（三月二十七日）掲載の作品である。掲載日からすれば、目の前の春の風景を見ての作品ではあるまい。風のなかに春の歌を聞き、ひばりの声を葉の中に聞き、「静かにゆれる水面にぽつつりおちる葉のしづく。やがてはうづの輪をかいて、遠くひろがりきえて行く」とする。詩情の展開は見事。「風呂に入る時」という作品は、流れ星を見てしまい、「恐ろしくて風呂に入るのが、急にいやになった。あゝ見なけりやよかつた」というもの。この他の作品にも、全く、「戦時下」の影はない。見たまま、感じたままを素直に描いている作品の多いのが、この月の「詩」作品の特徴といえる。

「短歌」は、合計四首と少ない（前の三首が第四五二号、後は、四七〇号）。

栃木県赤麻校六年　塚田　宏
ねる時にすぐに思うは兵隊の寒き露営の務はいかにと

千葉県二州校高一　東條　芳男
初雪の降り来る音をきゝにけりゐろりの端で手をかざしつゝ

山梨県高田校五年　児玉　元則
眠いので日記をつけるのがいやだなあと一人ごという二十二日の夜

小石川区竹早校五年　本多美代子
夕飯に楽しいことを語りゐる弟の顔を照す灯

言うまでもなく、これらの作品にも、「詩」作品と同様、深刻な「戦時下」は見られない。「兵隊の寒き露営」にしたところで、中国大陸に展開中の部隊とのみは考えられまい。第二首の見事さ、第三首は破調も破調。このような楽しい作品を掲載する余裕をさえ伝えてくれる。

「俳句」は一九句だが、掲載にはむらがある。作品数もそうであるが、作品内容もである。前の五句は、第四五八号に、後の二句は四六四号に掲載された作品。

千葉県小見川校高一　金親　三次

万歳と叫んだ声が遠ざかる

山梨県□校高一　柴田　重義

戦場に行かぬも畑にふるひ立つ

同　小笠原うた子

かちいくさ寒き夕の神詣り

同　尾畠志の子

初参りまづ皇軍の武運長久

山梨県増穂校五年　蘆沢　哲男

朝起会ラッパの音が寒そうだ

栃木県　五年　柄沢　正子

日曜で銃後の護お手伝い

仙台市榴岡校三年　真山　芳子

じどうげき兵隊さんたち大笑ひ

山梨県□（不明）校からの三句は、学年を挙げて、同じ句題での取り組みであろう。いずれの作品にも身内を戦場に送ったり、置いてのものではなかろう。「短歌」同様、「戦時下」の影は薄く、むしろ作句背景に時勢が読み取れるところだ。前年（昭和一二）八月一日から映画の始めに、「挙国一致」「銃後を護れ」などのスローガンを入れることが義務づけられたが、「日曜で銃後の護お手伝い」の句には、こうした政府から要求された国民精神の浸透ぶりを示すものといえよう。

「書方」は、合計で五八作品。この中で、時局を思わせる字句は「盡忠報國挙國一致堅忍持久」（第四五二号）と「正義皇軍進撃」（第四五八号）のみである。「盡忠報國挙國一致堅忍持久」が国民精神総動員運動のスローガンであることは、前述したところであるが、この標語の、「紙上作品展覧会」への登場は決して頻繁ではない。この総動員運動に対する世論一般の対処結果と考えるべきであろうか。

一方、政府は、この年二月二十四日、「国家総動員法案」を衆議院本会議に上程。日本の総力を戦争遂行に向けるための強大広範な統制権限を政府に集中しようというものであった。政友会の牧野良三、民政党の斎藤隆夫らの質問への政府側答弁に議場は騒然とし、混乱した。法案委員会における政府説明員、陸軍省軍務局課員佐藤賢了陸軍中佐の「黙れ！」事件など、曲折もあったものの、四月一日、「国家総動員法」は公布され、五月五日施行されるところとなるのであった。こうした、時局の展開が、「紙上作品展覧会」との関係を持つまでには、まだまだ、時間的な落差があったというところであろうか。

在校名が異なり、三作品が共通の字句を用いたものに「南極海捕鯨船」（浅草区五年男子、岩手県五年男子、茨城県五年男子）がある。この共通する背景を考えるには、当時の教材の検討が欠かせないが、今後の調査を待ちたい。字句の「南極海捕鯨船」に関するものでは、前年（昭和一二）に大洋捕鯨の「関丸」が世界初のディーゼル捕鯨船として、出漁。時間的には、多少、後のことになるが、日本水産の捕鯨母船「第三図南丸」の進水式が行われるのが、この年（昭和一三）五月一日。「第三図南丸」は、最新技術を備えた巨大母船で、日本水産はこれで三船団となり、大洋捕鯨などの三船団ともに、南氷洋の捕鯨に活躍するところとなった。「南極海捕鯨船」の字句が、「作品紙上展覧会」に登場したのは、この三月。こうした南氷洋捕鯨の状況が背景に考えられようか。

「図画」は、合計で二九作品。静物画が一〇作品、風景画が八作品あり、季節柄か、雛壇飾りも一作品みえる。同じく、「作品紙上展覧会」に初登場のものに、寝そべっている猫を描いた作品が一点ある。兵士や戦場、戦闘機など、時局がらみの図柄は四作品。特別に多いわけではない。

以上、昭和十三年（一九三八）の第一四半期、一月から三月までを検討してきた。この年、一月一日、新潟県十日町の映画館で積雪のため屋根が崩落、、観客二百人が生き埋め、七四人が死亡するという大

惨事で幕を開けた。一月三日、人気女優・岡田嘉子と新協劇団の演出家杉本良吉が樺太国境を越えて、ソ連に亡命した。一月十六日、政府は、「支那事変」の解決に際し、いわゆる第一次近衛声明を発表。「帝国政府ハ爾後国民政府ヲ対手トセス」とする声明で、戦争終結の道を閉ざしてしまうことになった。二月二十四日には、「国家総動員法案」が衆議院本会議に上程され、国の総力を戦争遂行に向け、統制権限を集中し、人も物も、すべて戦争に動員しようとするものであった。

従って、この昭和十三年の第一四半期は、国内的には、前年暮れの南京占領からの戦勝気分を引きずったままであり、中国大陸では、その後も戦闘は継続され、いわば「戦時下」が解消する状況にはなかったということになる。

こうした「戦時下」にあって、「作品紙上展覧会」の位相と展開は、一月は、前年暮れの南京占領を背景として、「戦時下」色の影響が強い作品が掲載されたが、二月、三月となるにつれて、その色彩は薄れて行ったことが確認できた。中国大陸での戦線は収束するどころか拡大傾向の時局にあって、一時、穏やかな春の陽がさしたということであろうか。

（一九九六・一一・二八）